

「賀古駅家、発掘ものがたり」 16 <白土の分析>



<瓦の下から白土が見つかったところ>

観察を行いました。「X線回折法」とは、試料にX線をあて、その跳ね返り方の違いによって試料がどのような化合物または鉱物であるのかを分析するというものです。顕微鏡による分析とは、植物の茎や葉にある植物珪酸体からなる珪化細胞列（灰像）というよくわからないものを観察し、植物の種類を調べるというものです（だそうです）。もちろんこのような分析は私達のような掘り屋さんではできないので、専門の分析会社に委託して行います。

分析した結論は、白土は炭酸カルシウムを含むような漆喰ではなく、ケイ酸アルミニウムを主体とした白色粘土（母岩は軽石質凝灰岩か火山砕屑岩か？）であり、中にイネ属の植物体（特に稲藁）がスサとして取り込まれている可能性が高いことがわかりました。

こうした科学分析も、古代の技術を明らかにしていく有力な方法の一つです。警察の「鑑識」「科学特捜部」と同じですね。考古学は当時の「実物」を研究対象とするために、様々な分析を行うことができ、「考古科学」とよばれる分野があるのもうなずけます。このあたりが文字の内容を研究する古代史（文献史学）とはアプローチの仕方が大きく異なるところです。

この白土は上郡町野磨駅家でも見つかっており、しかも同じ分析結果が出ています。どうやら播磨国の山陽道駅家には共通した白土が壁や塀などに使われていたようです。